

## 平成17年度病害虫発生特殊報第1号

岡山県病害虫防除所  
平成17年 7月 5日

- 病害虫名:** トマト黄化葉巻病  
病原ウイルス；トマト黄化葉巻ウイルス (Tomato yellow leaf curl virus: TYLCV) ]
- 作物名:** トマト (品種名；ホーム桃太郎)
- 初発生  
確認月日:** 平成17年6月22日
- 発生場所:** 倉敷市
- 発生状況  
及び特徴** 倉敷市の家庭菜園で栽培されているトマトにおいて、上位葉が黄化し、萎縮症状を呈している株が見つかった。(独)野菜茶業試験場にPCR法による検定を依頼したところ、本県では未確認のトマト黄化葉巻ウイルスによる「トマト黄化葉巻病」であると診断された。  
本ウイルスは国内では1996年に静岡県、愛知県、長崎県のトマトで初めて確認されて以降、分布域が拡大している。ミニトマト、トルコギキョウでの発生を含め、現在、関東、東海、近畿、中国、四国、九州の各県で発生が確認されており、大きな被害をもたらしている。
- 病 徴:** トマトでの病徴は、最初頂葉が黄化して葉巻症状を呈し、その後、症状が進むと葉は表側に巻き、葉脈間も黄化し縮葉する。さらに病勢が進むと頂葉が叢生し、茎部の節間が短くなり株全体が黄化萎縮する。特に生育初期に感染すると激しく発病する。また、発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後は開花しないか、開花しても不稔となることが多い。なお、本病と類似した病気にタバコ葉巻ウイルスによるトマト黄化萎縮病があるが、病徴のみで識別することは困難である。
- 病原ウイルスの  
生態:** (1)ウイルスの伝搬  
本ウイルスはシルバーリーフコナジラミのみが媒介する。成虫及び幼虫が罹病植物を吸汁することで、ウイルスの伝搬能力を獲得する。成虫の場合、約15分の吸汁によりウイルスを獲得し、約1日の潜伏期間を経た後、死亡するまで伝搬能力を持つ(永続伝搬)が、日本に分布する本虫は本ウイルスを経卵伝染しないとされる。また、汁液伝染、種子伝染、土壌伝染はしないが、接ぎ木では伝染する。
- (2)ウイルスの宿主範囲  
本ウイルスの感染が確認されている植物(これまで他県で確認されているものは以下の通りである(下線は栽培作物のうち病徴が認められているものである))。  
ナス科: トマト、ミニトマト、チョウセンアサガオ、ベチュニア、オオセン ナリ、イヌホウズキ、ピーマン、ジャガイモ  
キク科: タカサブロウ、ノボロギク、ノゲシ、ヒャクニチソウ  
マメ科: インゲン、ヒラマメ  
アオイ科: ウサギアオイ  
トウダイグサ科: エノキグサ、ショウジョウソウ  
リンドウ科: トルコギキョウ  
ナデシコ科: ウシハコベ  
スイカズラ科: スイカズラ
- 防除対策:** (1)放置されたトマト罹病株や野良生え、家庭菜園のトマトは主要な伝染源となるため、罹病株の早期発見・除去に努め、埋没処理する。また、圃場周辺の作物や雑草がシルバーリーフコナジラミの発生源となる恐れがあるので、周辺作物での本虫の増殖を防止するとともに、除草を徹底する。  
(2)シルバーリーフコナジラミを対象に、育苗時～定植時のネオニコチノイド系粒剤の施用及び定植後の定期的な薬剤散布を行う(岡山県病害虫等防除指針参照)。なお、本虫の感受性低下防止のため、同一系統薬剤の連用は避ける。  
(3)施設の出入口やハウスサイドなどの開口部には、目合1mm以下(0.5mm程度が望ましい)の防虫ネットを張ってシルバーリーフコナジラミの侵入を防ぎ、紫外線カットフィルムも併用するとさらに効果が高まる。  
(4)作付け終了後はトマトを地際から切断したうえで、施設を密閉し、トマトの残さが完全に枯れるまで蒸込みを行う。



上位葉の小型化と葉巻症状



葉縁、葉脈の黄化、縮葉



初期病徴

左、中写真:広島県病害虫防除所提供